

「40年を振り返って」

今年3月で北大を定年となり、大学院に入ってから40年余の大学での研究生活にピリオドをうった。引き続き、宇宙開発事業団と海洋科学技術センターによる共同プロジェクトである「地球フロンティア研究システム」で地球科学の研究に携わってはいるが、やはり一区切りということで、柄にもなくこれまでを振り返ったりしている（多忙のため、過去6年に4回の引越しに際して段ボール詰めにしたままだった書類や文献を整理したせいかもしれない）。

大学院生になってすぐに球電 (ball lightning) に興味を持って数少ない文献を調べたことがある。結局、どうしたらいいかわからず立ち消えになったが、ずっと後に1985年頃早大物理の大槻義彦氏が撮影に成功された写真を見て連絡をとり、一時は「火の玉」研究に加わろうと思った。しかし、まもなく地球温暖化が社会問題化し、それどころではなくなってしまった。その後、諫早豪雨や伊勢湾台風解析、雲層の赤外放射特性、不発に終わった多重格子 (ネスティング) の手法による低気圧や前線による小スケールの降雨の予報、その過程で派生した数値計算 (差分) 法の研究、大学院生だった山岬さんと一緒にやった台風発生の数値実験、と大学院時代から助手にかけての10年足らずの間にずいぶん分々の問題に手をつけた。しかし研究室をあげての共同研究だった諫早豪雨と伊勢湾台風以外は論文発表せず、当然学位もなく過ごしていた。にもかかわらず、九大の澤田教授が当時新設された大気物理学講座の助教授に、と声をかけて下さり、その時進行中だった赤道波の力学を論文としてまとめ学位を取るのを待っていて下さった。この事には、いくら感謝しても感謝し足りないという思いである。

教える立場になってからも興味のままに色々な研究をして来た。大学院生のテーマも本人の興味を尊重して来たつもりである。最近も、20年以上前に氷期・間氷期サイクルに関連して手をつけ、困難にぶつかって塩漬けにしていた粘弾性体に関する研究を再開し、いささか前進したし、同時に地球温暖化に関する研究のまとめであるIPCCレポートの中に、海洋による二酸化炭素吸収の取り扱いでとんでもない間違いをしているのに気付いて、最後の修士の学生と一緒に正しいモデルをつくったりしている。

というわけで、随分と色々なことをしてきたと思う。その時その時で面白そうな事、不思議に思ったことについて考えて楽しみ、また他人の間違いを叩く意地悪な楽しみもして来た。研究を遊びとしてほとんどの時を過ごして来られたのを幸せに思っている。そこで思い出す

のは、大学院に入って間もない頃、物理学科の物性関係の教授がプラズマ物理の研究に転じられる時に語られた「これからはプラズマが大事になると思うので」との言を聞いてびっくりした事である。研究とは、自分が不思議と思う事を追求することとしか思っていなかったので「大事になるから」という発想に衝撃を受けた。しかし、少し考えて、日本における大学、とりわけ東京大学の役割が欧米先進国から知識を輸入して国家経営に役立てることにあつたのだという事に（ずい分遅ればせながら）思いあたつたのであつた。そのような考えを持っていたので、二十何年か後、東大の教授を務めた時は、その自覚を持って社会的に重要な温暖化と気候変動の研究を進めるのに努力したつもりである。もっとも「温暖化」は、これまでの経験則が無力になる為に、基礎に戻って深く考えることが要求される点で基礎研究こそが最も実用的であるというパラドキシカルな事実があり、決して「つまらない応用研究」でないのだが。

とりとめもなく思い出を記して来たが、若い人たちが学界の流行とかリーダー的人物が決めた重要問題をフォローするのではなく、自分で不思議に思った問題を自分の頭で考え、自分の言葉で表現する「遊び」の研究をしてもらいたいと思う。論文数がどうの、国際的評価がどうのと正反対の状況が日本の科学を覆いつつあるが、そうでない時代の恩恵を受けた一人として、微力ながらこの流れに抗していくつもりである。「遊びの研究」と正反対のコンセプトにもとづく「フロンティア研究システム」で本来の意味でのフロンティアと呼ぶにふさわしい研究をしてやろうとも考えている。

松野 太郎